

教員の養成に係る教育の質の向上に係る取組に関すること

白鷗大学 教育学部長 赤堀 侃司 (2015年3月)

本学教育学部においては、学生に求められる資質能力を明らかにし、その資質能力を育成するためのカリキュラムを編成し、カリキュラムに基づいて教育実践し、その結果を評価して、カリキュラムを改善するというPDCAサイクルを実施することを決め、教育学部カリキュラム改訂委員会を設置し、検討を続けてきた。

上記の委員会が中心になって、いくつかの分科会に分かれ、2013年から2015年3月現在までに、以下のような調査研究を行ってきた。すなわち、①教育学部の5専攻・コースに所属する学生へのアンケート（本学への入学動機、カリキュラム・授業科目の評価、進路先、大学への期待など）、②スクールサポートに参加している学生へのアンケート（授業の合間に近隣の小中学校に出かけて、教員の補助などをボランティアとして行う活動）、③授業科目が目指す知識・技能・能力などの教員へのアンケート（学士力を基礎にしたアンケートの項目による調査）、④教員養成を主に目的とする大学への訪問調査（5名の教育学部教員による7大学への訪問調査）、の4つの分科会で実施した。

現在では、これらの結果を元に、2015年度に以下のような組織を作り対応する計画になっている。

- ①カリキュラム改訂委員会を発展的に解消し、履修モデル検討作業部会を発足して、専攻・コース別に、学生の進路に応じた推奨履修モデルを開発する
- ②教員の養成に係る組織である、教育実習委員会、履修モデル検討作業部会、実習指導室、進路指導部・進路指導課などを一括管理運営する、教職支援センター（仮称）設立準備委員会を発足させて、教員養成の充実を図る

以上の活動から得られた結果について、以下のようにまとめる。

1. 学生へのアンケート結果から、①教育学部の学生の気質として、きわめて真面目である、言われたことはきちんと実行できる、②特に幼稚園や小学校教諭を目指す児童教育専攻では、教員志望が圧倒的に多い、③短所として、自ら積極的に表現する力が弱い、文章力や表現力が弱い、などが分かった。これらを克服するカリキュラムが求められる。
2. スクールサポートでは、実践的な指導力を身に付けており、高く評価できる。自主的な参加を基本にしているが、当初平成18年では延べ67名（小山市のみ）であったが、平成26年度では、延べ403名（小山市、下野市、茨城県古河市）に増加してきた。
3. 他大学訪問では、国立大学と私立大学の教員養成では仕組みが異なるが、国立大学のミッションの再定義によって、教員採用数の増加に対する方針が強化されているので、本学も組織的な対応が求められている。
4. 教員へのアンケートから、現在の教育学部のカリキュラムでは、①専門的な知識・理

解・技能・表現などは十分達成できていること、②論理的思考力・倫理観・生涯学習力などは、平均的に達成できていること、③チームワーク・自己管理能力・社会的責任感などは、やや達成できていないこと、④グローバル社会への対応・コミュニケーションスキル・数量的スキル・情報リテラシーなどは、かなり達成できていないことが分かった。⑤さらに、専攻・コースや学年次進行に伴う達成項目の推移については、それぞれの専攻・コースの特徴が反映されていることが分かった。

以上の知見から、本学教育学部の教員養成に係る方針として、以下のように決めた。

- ①2017年度までは、現状を維持する。ただし、他大学との競争や臨時採用教員と既卒者への対応を図る
- ②2021年度の卒業生から、進路コース別の履修モデルによる卒業生を送り出す
- ③2018年度の入学生から、進路コース別の履修モデルを導入する
- ④教育学部のイメージを保持するため、教育学部の名称は、そのままとする
- ⑤ただし、教員養成と公務員を含めた一般企業への対応、教員免許だけを取得する学生への対応を、検討する

以上